



Title	モンゴル羊毛の再評価について : 内モンゴルの事例から
Author(s)	阿路思
Citation	モンゴル研究. 2018, 29-30, p. 25-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モンゴル羊毛の再評価について

— 内モンゴルの事例から —

あ る す
阿 路 思

はじめに

羊は古くから人間生活における必要性に応じて品種改良が行われ、FAO（国際連合食糧農業機関）2014年のデータ¹⁾によると、現在世界中の家畜羊は2,502種の品種が作り出されている。古い時代から羊とかかわってきたアジア諸国ではヨーロッパ諸国やオーストラリアより圧倒的に多数の羊が飼われているにもかかわらず、産物としての羊毛の評価は低く、ほぼ無名に近い。2008年チャールズ皇太子の提唱で、The Campaign for Wool²⁾は、イギリス国内の羊農家やウールメーカーに対するサポートや自然素材としての羊毛宣伝を打ち出した。従来のアパレルを中心とした評価だけでなく、自然環境や断熱材における価値が羊毛業界の視野に入ってきたということである。

20世紀の初頭から終戦まで、日本は内モンゴル地域の羊とその産物である羊毛と深く関わってきた。日本におけるモンゴル羊と羊毛に関する研究が戦前においても戦時中においても多く存在し、そのうち多数の研究が当時の内モンゴル、つまり植民地としての「満蒙」地域と「蒙疆（蒙古連合自治政府）」政権のもとで行われていた。本研究では、このような歴史的事実に鑑み、アジア在来種羊としての内モンゴル自治区内の在来種羊に研究対象を絞る。日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の妥当性を生物学、および地域研究の視点から検討する。現在中国における内モンゴル在来種羊の研究成果や、戦後日本畜産学における人間と家畜の関係に重点を置いた研究、日本の遊牧地域社会研究の成果なども参考にし、毛織物生産と持続可能性という二つの基準をもってモンゴル羊毛の再評価を試みる。

I 日本における評価

日本におけるモンゴル羊毛に関する研究は、戦前や戦時中の文献や、資料、新聞記事に多数存在している。それらの研究が対象地域とする当時の内モンゴルとは、「満蒙」という言葉が示すように、満洲と「東蒙古」を合わせた内の「東蒙古」、つまり、現在の内モンゴル自治区の東部地域と、1939年9月1日に設立した「蒙古連合自治政府」の統治下にあった現在内モンゴル自治区の中部地域が中心となっている。研究分野は、畜産学や繊維学、獣医学、そして、羊毛工業及び畜産業の分野にわたって

1) 家畜多様性インフォメーションシステム(Domestic Animal Diversity Information System)のデータによる。(最終閲覧: 2017年1月16日10:00)

2) <http://www.campaignforwool.org/the-campaign/>

いる。またそれ以外にも、当時の日本国内や植民地における新聞記事にもそれらの分野で活躍していた人物の書いた文章、インタビュー、講演内容などが多数存在している。

戦後、日本とオーストラリアの羊毛貿易の回復によって、羊毛原毛の輸入先はオーストラリアが中心的な位置を占める。また、現在の内モンゴル産の羊毛は中国国内市場に流れ込んでおり、輸出先にとってはおそらく、「内モンゴル産」羊毛ではなく、「中国産」羊毛となっている事情もある。結果、日本における内モンゴル羊と羊毛に関する研究が急激に減り、内モンゴル羊毛は日本の人々の関心から離れていった。現在内モンゴル羊と羊毛に関する研究成果はほとんど戦前と戦時中のものである。本研究では、畜産学及び畜産業、羊毛工業におけるモンゴル羊毛に対する評価を取り上げる。

1. 畜産学

芝田(1957: 97-98)では、「蒙古羊」は、「中国種」とほとんど同種と考えられ、毛用種や肉用種、毛皮用種、兼用種のうち、毛皮用種に属すると主張されている。この「蒙古羊」の品質について、芝田は次のように述べている。「春毛が良質で秋毛は質不良で短い。夏に1回剪毛したものは夏毛又は伏毛と称し一層劣等である。梳づたものは抓毛又は梳毛と呼び良質なるも産量が甚だしい…中国種は体が小さく、肉質は悪くないが、肉量は至つて少ない。」また、旧満州で「満洲羊」とメリノ種とを交配させた改良実験が良い成績をあげたことにも言及されている。さらに、「中国種のみではなく、コーカシヤ、ペルシヤ、シベリヤなどアジア系の綿羊は一般に尾は体の割合に大きく脂肪が溜まり、尾坊が汚れていて、しかも断尾は行われない。体質はいずれもきわめて強健で、粗飼料に耐える。中国種はわが国へかつてかなり多く入ったことがあるが今は殆んど飼われていない。」としており、中国種の羊についてその特徴が述べられている。

芝田(1957)には、いくつかの問題点が指摘できる。まず「蒙古羊」と「中国羊」、「満洲羊」がお互いに区別されず、品種についての記述が曖昧になっていることである。次は、「抓毛」と「梳毛」が良質とあるが、「春毛」や「秋毛」、「夏毛」との間の違いがはっきりしないことである。「断尾は行われない」という叙述については、断尾する改良品種であるメリノ種羊と交配させる実験が当時行われていたため、文脈から考えると、おそらく比較対象はメリノ種羊と推測できる。著者の在来種羊に対する評価は「良質な毛が取れるにも関わらず、産毛量が低い」、そして「肉質が悪くないが、肉量が少ない」の点にある。産毛量の低い良質な毛とは何かについては明らかでない。

およそ同じ年代の1950年に出版された草刈虎雄の『畜産学』の「蒙古羊および寒羊」の章節では「蒙古羊」についての研究が上述の文献より一層詳しく論じられている。草刈(1950: 93-111)は「蒙古羊」の産地について、そして飼育活動の主体は「蒙古人」であることを次のように説明している。

「蒙古羊は内外蒙古を原産地としているが、主産地は、内蒙古では乾陽・達頼罕・巴林・喀喇沁・烏珠穆沁などで、満州では旧黒龍江省の蒙古に接した地方である。蒙古人は主として羊肉および毛皮を目的として飼育している。」

また、「蒙古羊」の飼育方法と毛質について次のように述べている。「蒙古羊は脂肪尾種に属し、体格は小さく、生体量は牡60kg、牝45kg内外である。…体質は頗る強健で、また健脚であって、蒙古では水草を追って放牧を行っている。…毛質は7cmぐらいい、毛質は極めて粗剛で、粗毛を多く含み、カーペット用として利用されるに過ぎない。」

公主嶺農事実験場で行われた羊毛改良事業についても次のように述べている。「満州における蒙古羊

の毛質改良は、農耕地帯においては大いに価値があるが、遊牧地帯においては大きな意義があるものとは考えられない。」

草刈は「蒙古羊」は遊牧生活の中で飼育されているため、羊毛について改良することには大きな意義がないと主張する。草刈は、公主嶺農事実験場における改良原種としての「メリノ種」と「コリデール種」を比較対象にして、遊牧民の「蒙古羊」の羊毛利用に関して、「カーペット用として利用されるに過ぎない」と述べ、羊毛の品質については「毛質が粗剛で、粗毛を多く含む」と述べている。

戦後になると、日本人の食生活の中で動物蛋白質の摂取量が段々増大し、従来家畜が担っていた農業労働は徐々に機械化されていった。一般都市住民の消費している乳肉卵が工場によって生産・加工・商品化されるという背景の下で、一部の畜産学または獣医学、生物学研究者たちが人間と家畜の付き合いの歴史について研究するようになった。

『家畜と人間』(野澤・西田 1981)はその研究成果の一つとして挙げられる。羊に関する章節はないが、第一章「ヤギ——遊牧民の伴侶」において、遊牧生活様式と遊牧民の家畜利用に着眼点を置き、飼養者の経済生活にとっての在来品種の重要性を示している。また、『アジアの在来家畜』(在来家畜研究会 2009)では、アジアの在来種羊の起源と系統史について述べられている。モンゴル国産のハルハ羊 (Khalkha sheep) と中国産のバインブルク羊 (Bayanbulak sheep) が在来種羊の調査対象とされている。羊毛のための品種改良が、在来種羊にどんな影響をもたらしたのかについて、また野生羊からメリノ種羊に至るまでの過程が論じられている。

アジア在来種羊の毛の構造については、角田 (2009: 260-261) が、次のように述べている。「春から夏期にかけて抜けた毛が固まった状態で体にまとわり着いている。しかし、今日の高度に改良されたヒツジは、換毛傾向がほとんどなくなっている。すなわち、家畜化による大きな変化は換毛の消失である。それによって羊毛の収量を引き上げる意味があった。」また、アジア在来種羊の特徴について、「原始的あるいは未発達なヒツジは、まだかなりの毛が抜け換わる」と述べられている。しかし、モンゴル羊とモンゴル羊毛に関する研究は具体的に文献の中に展開されていない。角田 (2009) は、アジアの在来種羊の毛の特徴を述べる際に、イギリスの生物学者 Ryder の研究を参照している。

Ryder (1983: 299) は、I.L.Mason からもらったモンゴル羊毛とされるサンプルを観察し、次のように述べる。「It had fine fibres ranging from 12 to 34 microns with the unusually low mode of 16 microns. There were coarser fibres ranging from 40 to 60 microns, with one at 86 microns, and 20 percent of the total had a medulla. The overall mean of 24 microns was low for a hairy fleece type」と述べ、つまり、モンゴルの羊毛を「fine fibres」と「coarser fibres」に分け、そのうち「fine fibres」の中に 16μ 以下の毛があることは普通ではないと評価している。そして、モンゴル羊では毛の太さの平均値が 24μ となっているが、この数字は一般の毛用種羊の毛より低いと主張している。

野澤 (2009: 3) は「家畜とは何であるか」について論じる際、現在まで日本人が繁殖させ、利用してきた家畜は、ほとんど他地域由来だと述べている。つまり、近年のウズラだけを例外として日本人が自ら家畜化した動物はほとんどないと主張している。野澤によると、この背景の下に、日本の畜産学や動物学において「家畜とは何か」という問題を扱う研究は極めて少なかった。さらに、彼によると、日本の畜産および畜産学においては、主に家畜の実利的・経済的側面に焦点が当てられ、日本の動物学においても、野生動物の生態の解明に力点が置かれた結果、家畜の性格をもった動物は研究対象としてむしろ排斥される傾向にある。家畜の毛に関する Ryder の研究は、野澤の言う家畜に「実利を求

める」研究というより、むしろ「家畜の性格」に着目した研究とみることができる。その点で、Ryderのモンゴル羊毛に対する評価は、これまでに挙げた日本の畜産学における評価と異なる。本研究では、モンゴル羊と羊毛の特徴について考察する際、野澤・西田(1981)、角田(2009; 2010)およびRyderの研究を参考にする。

以上の評価によると、次のようにまとめることができる。まず、戦前の畜産学におけるモンゴル羊毛研究においては、すでに羊の飼育主体はモンゴル人であり、羊と羊毛の比較対象は品種改良されたメリノ羊とその毛である。さらに、モンゴル羊毛の品質は、そのすべてが劣っているのではなく、そのうち良質なものもあることがわかる。

モンゴル羊毛に対する評価を概観したが、これらの評価に対して問題点を指摘することができる。すなわち、モンゴル羊毛がどのような構造をもっているかについて、また、モンゴル羊毛の良質な部分についての研究がなされていない点である。

2. 畜産業・羊毛工業

畜産業と羊毛工業におけるモンゴル羊毛に対する評価の情報は、研究書として書かれたもの以外に、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブの新聞記事文庫³⁾を利用して必要な情報を入手した。

当時の新聞記事におけるモンゴル羊毛の評価について見てみよう。以下の5つの新聞記事では、概して、モンゴル羊毛がメリノ種羊毛に比べて品質が悪いという評価が述べられているものの、北海道の畜産加工工場経営者であるカール・レーモンによる寄稿では、モンゴル羊毛がメリノ種羊毛に対して優秀な防寒機能と絶縁機能をもっている可能性について、高く評価されている。

「歐洲戦乱の結果我が毛織物界は非常なる活況を呈し従って我社の如きも頗る繁忙を極めつつあり従来露国陸軍が軍隊用羅紗は蒙古産と西伯利亚産とを以て之に先て来れり是れ蒙古産は品質に於て濠洲産に劣れるも之を西伯利亚産に混淆して紡織する時は何等染色の勞を要せずして自然的に其色合所謂カーキー色となり恰も土色と異なるなく軍服として恰好品なりし為め従来は一に之のみに依りしに開戦以後欠乏を告げ止むなく濠洲品を染色して代用せしが同品は価高く且つ蒙古品に比して質弱きも脊に腹は替えられず現に之を原料として日本及び米国に於て旺んに製絨しつつあり……」

——「毛織物界現況」(日本毛織会社社長川西清兵衛談)

満州日日新聞 1915.9.23

「本邦の軍需品としての羊毛独立策は大戦後最も真摯に研究され夫が資源として東蒙古の羊毛に対する注目は最近に至りて一層大を加えたるが如く今其の蒙古産羊毛の品質を聞くに元来羊は肉用種及び毛用種とに二大別せらるるものなるが蒙古の牧羊は主として肉と皮とに存するものなるが故毛質と最も密接の関係ある牧草及び種羊の改良飼育法の如きは全く顧みら

3) 「新聞記事文庫」については、山本(1986)による説明が詳しい。以下にその概略を記そう。

神戸大学経済経営研究所によって作成された明治末から昭和45年までの新聞切抜資料であり、60年以上にわたって営々と積み上げられた切抜帳は約3200冊、記事数にすれば50万件という膨大な量になっている。「新聞記事文庫」の収録範囲は経営・経済を主体としながら、社会・政治・外交・法制・教育などにいたる。採録する記事の選択と分類は専門研究者の視点で行われていたことが大きな特色で、大阪の主要紙と経済紙である「中外商業新報」をはじめ、東京・大阪のその他の新聞、地元神戸の新聞、さらに主要地方紙や当時の植民地・外地紙などが採録対象となっている。

れざるを以て外国産羊毛に比し毛質粗硬捲縮少く軍用毛布軍用絨等には適するも上等毛織物たるに適せず又本邦に於て最も重要あるメリノー種毛の代用品たることは不可能なるべしと……」

——「蒙古羊毛品質」

満州日日新聞 1918.2.1

「……生産は九牛の一毛にすぎない然るに支那に於いては現在約二千万頭の綿羊があり五千万斤の羊毛が生産するが其土地は広漠で気候風土も綿羊の飼育に適するから二千万頭の羊を倍加することは至難ではないと思う然し支那産の羊毛は多く欧米に輸出され我国には僅しか需要がない之れ支那の羊毛が品質不良にして我国の毛織工業は之れを原料として製絨する迄の程度に発達していないのみならず之れを製絨しても製品の販路に苦むのである故に如何にして支那の羊毛生産を増加し其の品質を改良して我国の需要に応じ得るかは重大なる問題である支那全国の綿羊を改良することは別として満蒙の地には幸いにして多数の綿羊が居るから先ず手近なる満蒙の綿羊を改良することが策の得たるものである羊毛の出廻り高から推算する満蒙の綿羊□数は二百五十万頭に上っているが蒙古綿羊は元来肉と毛皮を目的としているから毛質については何等改良□実が挙げられず毛の品質不良で且毛量少いのが欠点である満鉄公主嶺農事試験場では大正三年以来メリノ、サウスダウンシュロブシア等の優良種羊を輸入して毛質毛量の改良試験を重ねた結果満蒙の綿羊改良が技術的に明かになったのは一大発見である……」(印字不良で判読できなかった文字を□とした—著者)

——「満蒙の綿羊改良」(柝内満鉄農務課長談)

満州日日新聞 1923.5.1

「……蒙古綿羊の羊毛はその粗雑な自然の状態のままで厚さ一時位の毛布に織られ、蒙古人や支那人に適当に使用されている、私はメリノー種の羊毛が同様の厚さの毛布に織られたとしても果してそれが北満の冬季にあって同程度の保温力を発揮し得るかどうか疑問であると思う、仮令蒙古の綿羊が、メリノー種に比較してその三分の一の分量に相当する所謂劣等羊毛を生じるとしても前者が寒気に対する優秀なる防寒具を提供するのであるから、かかる差別は、前記劣等羊毛の科学的試験を行えば、厳正とはいわれないことは当然である、しかし蒙古羊毛が綿密なる検査と実験の題目に供する価値のあることは明瞭である、蒙古羊毛の偉大な絶縁の性質を想えば、これが将来において或種の新興産業に原料を供給するようになることは必ずしも不可能でない。

私は過去において微妙な柔軟な銀の如き糸、目方の軽い有効なる絶縁体即ち「絹毛」(シルク・ウール)のことを考えた、かかることを想像することは空想の如く考えられる、併し誰が二、三百年以前に木材パルプから絹を採り、石炭から液体燃料を採ること、その他幾多の発見を予想したであろうか、そこで右の「絹毛」は蒙古羊毛の優秀な繊維を破壊して作成するのではなくて、そこに含まれる自然の油脂を損せずこれを乳剤質とし、更にこれを精製し再製して、メリノー種又はコリデール種の羊毛から得る繊維より更に選練された繊維を得ることを目標とすべきである……」

——「満洲国緬羊事業の有望性」特別寄稿 カール・レーモン氏⁴⁾

中外商業新報 1936.10.17-1936.10.20

1936年5月、オーストラリア政府は日本製絹布・人絹布(レーヨン)への関税率を大幅に引き上げた。翌月、日本政府はその対抗措置として通商擁護法を制定し、オーストラリアからの羊毛、小麦の輸入を制限した。オーストラリア政府はさらにこれの対抗措置として、日本の輸出品に輸入許可制を適用させた。報復合戦の結果として、12月に「日豪通商暫定協定(tentative agreement)」が締結され、それによってこの戦いはようやく終了した。日豪通商紛争はこのような経緯をたどったのであるが、その真ただ中において、佐々木(1936: 375-387)は、この問題の解決策として5つの提案をしている。そのうちの2つは、雑種羊毛の使用増加と内、鮮、満綿羊飼育事業奨励である。モンゴル羊毛については、特に以下のように述べている。

「……雑種羊毛はメリノー羊毛に較べて毛足が長く、太く觸感が硬いから肌着用のシャツや薄い婦人服には向かないが、男子服、オーバー、ジャケット、靴下等には好適である。現に蒙古羊毛は可成り米露が使つてゐる。米露が使ふのに日本が使へぬ筈が無い。宜しく、今後は我が友邦満洲国産の粗毛を使ひこなす研究が肝要ではあるまいか。」「友邦満洲國に於ける緬羊頭数は大体四百万頭と見られてゐる。大部分肉食を目的とする蒙古種、カーペット種で、体量は牡は百三十封度、牝は九十封度位である。強健にして寒暑によく耐へるが、産毛量三、四封度の少量で、しかも品質が悪く、粗く、弱く、羊脂が少く、蒙古風を冠る結果生砂の混入が多く、加ふるに死毛も混入してゐる。」

佐々木は、モンゴル羊毛の品質がメリノ種羊に劣り、「カーペット種」とであるという評価以外に、当時の状況について述べている。羊毛は戦時中においては、もはや商品ではなく、軍需品であると主張する。

『支那の毛織工業』(全国經濟委員会編 1941: 27-28)では次のように述べられてる。なお、同書で述べる「支那の羊種」には、夏羊、呉羊、蒙羊の区別があり、モンゴル羊(蒙羊)もその中に含まれている。

「支那の羊毛は一般に甚だしく粗強で、光澤を帯び、繊維やゝ短く、衣料毛織物の紡織には餘り適してゐない。併しこれを用ひて絨氈を製織すれば、極めて優良であるが、それは繊維が稍粗く且つ弾力性に富み、出来上がった絨氈は頗る堅牢で踏つけても尚ほ倒曲しないからである。支那の羊毛にも亦寒羊の如き稍細手毛織物の紡織に可能なるものもあるが、併しその産毛量は極めて少なく且つ入手が容易でない。」

4) 「カール・レーモン氏は嘗つて本欄で「情熱とロマンスの工場主」として報じた通り、北海道畜産加工界の伸展のために永らく奉仕的力闘を続けて来た親日独逸人で、現在函館近郊でハム、ソーセジ等の加工工場を経営している、彼は僅か二十四歳の青年の折、世界畜産加工界のナンバー・ワンといわれるシカゴのアーム会社社長にその人材を認められ一躍一千二百名の職工を使用する大工場の次長となり、その後同社の技師長の要職にまで栄進したが、この輝かしい地位を振り棄てて来朝以来、夫人の故郷たる函館を第二の故郷とし、農村民に多角的有畜農業経営の必要なるを説き献身的にその普及に尽粋して農民感謝的となっている、本稿は満洲における緬羊事業の有望なることを力説、日本緬羊業者を鞭撻の爲め特に同氏が本紙に寄せられたものである」(同記事カール・レーモンの紹介より)

『支那の毛織工業』によると、モンゴル羊の羊毛はメリノ種ほど羊毛の品質はよくないが、フェルトとしての品質は高く評価できるとしている。

当時中国国内での羊毛分類方法はとても多様であり、採毛方法や採毛季節、採毛年齢、羊の性別、産地等によって分類されていた。これに対して『支那の毛織工業』では、「一定標準の缺除に伴ふ分類の困難」さが問題視されている。だがここに述べる「一定標準」とは、機械生産に応じたものであり、つまり、毛織工業にとっての「良い品質」の羊毛とは、細いほど優良であって、また繊維の長さや太さがそろっているもの、そして捲縮度の多い、脂肪含有量の多いもの、夾雑物の少ないものが「良質」であるという主張なのである。

ここには、伝統生活の中において家畜と人間の調和生活から生み出されてきた評価システムと、機械化大量生産のシステムとの対立が見られる。この時代の日本羊毛工業は、毛織物生産を中心としていた。そこから出発する羊毛に対する評価に限界が生じたのである。つまり、フェルトの製造のため、モンゴル羊毛がアメリカに輸出されているという情報は業界内で共有されてはいたものの、視野の中には上等な毛織物しか入っていなかった。南満洲鉄道株式会社、天津事務所発行の『北支那の羊毛』におけるモンゴル羊毛の品質に対する評価は、『支那の毛織工業』と一致している。

戦前戦中の日本におけるモンゴル羊とその羊毛に対する評価を整理すると、羊の品種は原始的で、羊毛は太くて粗く、メリノ種羊に劣り、良質な毛織物に適さないという評価である。この点以外に、2つの興味深いポイントがある。一つは、モンゴル羊毛の中に良質な毛があるとされている点、次にフェルト素材としてはメリノ種羊毛より保温性が高く、寒い地域で活用できると評価されている点である。

しかし、「良質な毛」とは何であるかについて、明確には記されていない。また、モンゴル羊の厳しい自然に対する優れた適応能力による羊毛の保温性についても、より詳しく検討する必要がある。モンゴル羊毛はどのような特徴を持っているか、また、それらの特徴とモンゴル羊の飼育方法や飼育主体であるモンゴル人の生活様式との関係性について改めて検討してみたい。繊維としてのモンゴル羊毛の利用可能性と、羊毛利用目的に関する歴史的・文化的背景を分析し、モンゴルの羊毛を改めて評価することとする。

次節では、内モンゴル自治区に関する中国の牧畜研究を参考にして、モンゴル羊について記述することにする。

II 内モンゴルの在来種羊

1. モンゴル羊と起源

「モンゴル羊」とは、明確な定義によって定着している概念ではなく、文字通り「モンゴル」種の羊、つまり、「モンゴル」という地域で飼われている羊として一般的には理解されている。あるいは、「モン

ゴル人」に飼われている羊として理解することもできる。「モンゴル人」は、生物学的人種の定義⁵⁾から出発する三大別(ネグロイド、コーカソイド、モンゴロイド)のうち、アジア州の東半分から大洋州の島々、また南北アメリカなどに広がっている「モンゴロイド」を意味しているのか、エスニシティ概念から出発した言語、宗教、生活様式など文化的要素や歴史的経験の共有感から生み出されたものか、それとも国民国家の概念からのモンゴル国なのか、極めて複雑で簡単にはまとまらない概念である。

加茂(1973: 826-828)とZeuner(1963: 197)によると、犬の家畜化は羊と山羊の家畜化より先行し、後者の家畜化も犬を使ったことによって成立した。Zeunerは、羊が最初に西アジアで家畜化されたという説は学術的に説得力があると主張する。角田(2009: 277)は、モンゴル高原へ最初に移入されたヒツジのタイプは明らかでないが、現在のモンゴル羊は恐らくシュメール時代前後のメソポタミアから東方へ拡散してきた脂尾羊集団が基であり、さらに南下して様々な中国羊へと形態分化していったものと推定されると主張する。

本研究の検討する「モンゴル羊」は、「モンゴル高原」およびその周辺地域、つまり国の単位で考えると、モンゴル国や中国内モンゴル自治区の家畜として飼育されている在来種羊のことである。本稿では、内モンゴルを主な考察地域とすることにする。内モンゴル自治区の資料や情報が比較的に入手しやすく、また戦前戦中の資料も内モンゴル中心で展開していたためである。

2. 内モンゴルの在来種羊

羊の品種は、生息地域の自然環境や、そこで暮らす人間の暮らしと緊密な関係を持っている。したがって、地方の名前、あるいは部族の名前が羊の品種の名前に使われることがよくある。従来、在来種羊について、遊牧生活において、色や体格、尾の大きさ、鼻や耳や角の形などの基準がある程度は存在していた。しかし、近代以降の科学技術の発展に伴い、各地方の自然環境への優れた適応能力を有し、豊かな産物を提供してくれる在来種羊をさらに選別、交配、飼育、管理するなどのプロセスを経ることで、体に関してより具体的な基準を作ることができるようになった。中国においては、これらの一定の基準の枠内に収まる羊は中央や地方行政機関に一つの品種として認定されることが多くみられる。

このような背景のもとで、中国の政府や牧畜研究機関、現地の牧民などの協力に基づき内モンゴルの在来種羊は主に肉用品種とし、地方良種としてフルンボイル、ウジムチン、ソニド3種に定着している。

樊宏霞・薛強(2010)によると、ウジムチン種羊の飼育地は主にシリングル盟であり、特に東ウジムチン旗、西ウジムチン旗、アバグ旗およびシリント市で飼育されている。ソニド種羊はゴビ羊とも呼ばれ、

5) ここで近代科学における「生物学的人種」の概念自身がさまざまな問題を抱えていると考えられるので、ここで説明する必要がある。『文化人類学事典』における竹沢泰子の人種についての解釈によると、「人種とは、遺伝的に異なった身体的特質をもつ社会的に信じられてきた集団である。かつては、皮膚の色、眼の色、毛髪形状、体型等の身体形質により〇〇人種、〇〇人種というように、人類をいくつかの数に分類するための生物学的な概念である。しかし今日では、人種は生物学的に有効な概念でなく、社会的につくられた概念にすぎないというのが、国際的な通説となっている。(日本文化人類学会編 2009『文化人類学事典』P132)」。

さらに竹沢(2005)によれば、「人種概念の内在特性」とは、「第一に、人種の資質とされるもの(可視的および非可視的身体要素、気質、能力など)が、系譜的に世代から世代へと身体を媒介に『遺伝する』もの、出自によって決定され、環境や外的要因では『容易に』変えることができない」ものだと信じられていること。第二に、自己・他者認識の境界を引く主体が他者集団に対して排他性を示す傾向が強く、とくに古典的な人種概念においては集団間に明白な序列階梯が想定されること。第三に、その排他性や序列階梯が政治的・経済的あるいは社会的制度や資源と結びついて発露するため、単なる偏見やエスノセントリズム(自民族中心主義)に基づく差異の認識にとどまらないこと、つまり組織的な差異化であり利害と関係しやすいこと、である。」竹沢(2005: 14-15)

シリングル盟東西ソニド旗、ウランチャブ市四子王旗、包頭市ダルハン・ムミンガン連合旗、バヤンノール市ウラド中旗で主に飼育されている。フルンボイル種は、主にフルンボイル地域、つまり、フルンボイル市新バルグ右旗、新バルグ左旗および陳バルグ旗三旗とエヴェンキ族自治旗で飼育されている。

(1) フルンボイル地域のフルンボイル羊

本節では、フルンボイル地域のフルンボイル羊について、その特徴を詳述しておこう。それに先立って、まずは、フルンボイル地域について確認しておきたい。

内モンゴル自治区の東北部にあるフルンボイル市は、総面積25.3平方キロメートルである。内モンゴル自治区における三つの少数民族自治旗(オロチョン自治旗、エヴェンキ族自治旗、モリンドワダウール族自治旗)はフルンボイル市に含まれる。フルンボイル市は、南北に走る大興安嶺山脈によって東地域と西地域に分かれる。西部はモンゴル国と接し、東は黒龍江省に隣接する。南は内モンゴル自治区の興安盟に、北部および北西部はアルグン川を境界としてロシアと接している。

長期的な自然淘汰や人為淘汰を経て、フルンボイル羊は、現在フルンボイル市の主な在来種羊品種として定着している。フルンボイル羊は主にバルグ種と短尾種2つの品種に分かれている。

まず、バルグ種羊について、王玉・劉衛平(2006)のバルグ種羊に関する研究によると、新バルグ右旗、新バルグ左旗および陳バルグ旗三旗の地域で多く飼育されているバルグ種は、現地の牧民には「バルグ羊」と呼ばれている。また、短尾種のフルンボイル羊に関しては、李宏図・秦秀娟(2006)の研究によると、尾部がバルグ種羊より短いことからその名で呼ばれ、主にエヴェンキ族自治旗に飼育されている。短尾種羊はフルンボイル地域でおよそ1世紀に渡って飼育される歴史があり、起源については明確な記載がなく、主に次の2説に分かれている。一つは、もともとフルンボイルの地域に存在していた品種であるとする説であり、もう一つは、1918年に2人のブリヤート人の牧民がソ連のバイガル湖地域から2つの群れ約2000頭をフルンボイル地域につれてきた羊の品種だとする説である。フルンボイル種羊に関する上記の2つの研究に基づいて、フルンボイル種羊の外部形態を表1にまとめる。

表1 フルンボイル種羊の外部形態

	バルグ種	短尾種
体格	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体格の大きさが中等である ・ 骨格が強固である ・ 後軀が発達している(飼育環境によって足の長さに差がある) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体格の大きさが中等である ・ 尾部を除いてバルグ種と似ている。 ・ 体高がバルグ種より少し高い。
尾	長さ：17-19cm 幅：14-16cm 脂尾タイプ	長さ：8-14cm 幅：11-20cm 脂尾タイプ <ul style="list-style-type: none"> ・ 尾部の形によって小桃型と長円型に分かれる ・ 尾部が退化し生殖器が外部に現れているため交配しやすい超短尾型も存在する
鼻	ローマン形*	ローマン形
耳	耳が大きい。垂耳**である。	耳が大きい。垂耳である。
角	<ul style="list-style-type: none"> ・ 牡羊は部分的に角がある ・ 牝羊は角がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 牡羊は螺旋状の角がある ・ 牝羊は角がない

* 鼻の形状が横から見ると、鉤鼻となっていることである(角田2009: 263)。

** 野生羊の耳はかなり小さく堅いが、家畜化によって大きさの増加とともに下垂してきた。垂耳の羊は古代エジプト時代から存在していた。これは体温調整と関係する必要性からの変化ともいえる(角田2009: 262)。

写真1 バルグ種の羊



出所：新バルグ左旗出身の友人アルシャン提供。

写真2 バルグ種の羊



出所：新バルグ左旗出身の友人アルシャン提供。

(2) シリンゴル地域のウジムチン羊

ウジムチン種羊は内モンゴルシリンゴル盟東部のウジムチン草原で主に飼育されている。1978年ウジムチン羊の選育は内モンゴル自治区の重点科学研究項目となった。1986年内モンゴル自治区人民政府は、ウジムチン羊を正式に国家級標準の「ウジムチン種羊」として認証し、それ以来地元に着している。

坡・特木爾(2005)は、ウジムチン種羊を足の長さと羊毛の太さによって、足短いタイプ、足長いタイプ、その間の長さのタイプ、毛の太いタイプの4種に分類したが、そのうち足の短いタイプと長いタイプが主に選育されている。

外部形態について、佟玉林(2005)によると、短脚種と長脚種の30%が14対肋骨を持ち、鼻はローマン形である。牡羊の多数は螺旋角であり、牝羊は角をほとんどもっていない。耳は大きく下垂し、一年中の放牧生活に優れた適応性をもっている。体格は強健で、後躯が発達し、背中がひろい。

王(1989)は、外見の違いによってウジムチン羊はM、H、L型3種に分けられるという。このような遺伝的多様性を持つ特徴が形成される原因についても王(1989)では言及されている。王によれば、ウジムチン羊の飼育環境は厳酷で(冬は長く、壊滅的な力をもつブリザードが吹き荒れている)、羊の群れは大きく(大きい群れは2,000頭程の規模を持っている)、飼育方法は粗放である(柵と屋根がない)ため、人間による淘汰よりも、自然による淘汰の方が、圧倒的に強い力を持っている、ということである。自然選択の結果、1つの生態環境の群体に2種、あるいはそれ以上の種類が混在していることもある。遺伝的多様性は、生物種が環境を利用する際の効率を上げ、環境を適応する面で意義があると王は主張する。

写真3 ウジムチン種羊



出所：2013年8月、東ウジムチン旗と接している興安盟ウランモドソム地域にて筆者撮影。

(3) ソニド羊

ソニド羊の肉が古い時代から中国では特に有名である。優良な在来種羊の品種として地元の行政や牧民たちに保護されている。ソニド左旗人民政府のソニド羊品種の認証システム⁶⁾の資料によると、ソニド羊は「ゴビ羊」と呼ばれ、モンゴル羊に属し、ソニド草原で主に飼育されている。元、明、清時代の皇族に貢物として献上され、古い歴史を持つ北京の有名な羊鍋料理レストラン「東來順」の専用羊肉でもある。1986年にはシリングル盟技術監督局に地方良種として認定された。1997年内モンゴル

6) ソニド種羊のデータ、養殖モデル、屠殺加工、購入した畜肉の情報を調べるシステムである。中国語のサイト：<http://www.snty.com/index.aspx> (最終閲覧：2018年2月11日)

自治区人民政府に正式に「ソニド羊」と命名された。現在は畜肉ブランドとして中国において非常に有名である。ソニド羊の体格は、大きく強健で、牝羊も牡羊も角はない。他のモンゴル種羊と較べると、首の部分が発達している。臀部はやや盛り上がっている。

現在の内モンゴルにおける在来種羊のうち、国家レベルで認定された品種として定着したのはウジムチン種である。内モンゴル自治区政府レベルで制定され、品種として定着したのは、フルンボイル種とソニド種である。以下では、3種類の在来種羊の共通点をまとめることによって、内モンゴル在来種羊の外形および特徴について説明したい。内モンゴルの在来種羊に見られる共通点とは、中等の体格、垂耳、脂肪尾、ローマン鼻形であり、牡羊には角が見られるが、牝羊には見られないことである。また、頭や首、目周り、そして、手首および踵以下に斑が良く見られる。寒い地域での放牧生活に適し、太るのが早く、繁殖力が高く、病気と自然災害に強いなどの共通点も見られる。

自然環境は、国境や行政区分によって切り分けることができない。ウジムチン種羊は必ずしもシリングル盟に飼育されているとは限らず、ホルチン地域のジャルート草原、そしてシリングル盟の近隣地域でも見られる。また、モンゴル国にも「ウゼムチン」という名前の羊が存在する。

中国においては、羊毛のための品種改良を内モンゴルで行っているが、これらの在来品種の羊が品種として定着できるのは、良質な畜肉を求める市場があるからである。そして、さらに重要なのは、これらの羊がモンゴルで長い飼育歴史を持ち、牧民に飼い慣らされており、内モンゴルの草原地帯の自然環境や現地の牧民の放牧活動にもっとも適しているからである。モンゴル高原の主な地域は標高が900－1300mであり、大陸性気候である。降水量は毎年200－300mmで、平均気温が10℃前後である。厳しい自然条件の中で、モンゴル在来種は一年を通じ放牧生活に適応し、太りやすく、大雪が降った後、放牧ができない時にしか乾燥させた牧草飼料を与えない。このような自然環境の中では、人為淘汰よりも、圧倒的に自然淘汰の力が強い。そのために、遺伝的な多様性を持つようになったこともモンゴル在来種羊の特徴の一つである。このような遺伝的多様性は、モンゴル羊の自然災害への適応能力に積極的な意義を持つ。FAO(国連食糧農業機関)のDAD-IS(家畜多様性インフォメーションシステム)が提唱するように、現在、家畜の多様性を維持することは世界レベルで重要視されている。品種の多様性は、気候変動に起因する困難な課題の解決に繋がるからである。また、動物の遺伝資源への脅威に対処できるように、脅威をより具体的に特定する必要性を提唱している。

モンゴルの在来種羊に対する中国の研究者や業界関係者などの評価は、羊毛利用以外の面でより適切だと言えよう。これと対照的に、なぜ、日本におけるモンゴル在来種羊に対する評価は「原始的」であり、そして比較対象が常にメリノ種羊なのかという問題は、第四章で具体的に論じられる。いずれにせよ、モンゴル羊と羊毛を考えるにあたっては、人間と家畜の歴史や産物をどう利用するかという文化的背景、そして環境などの諸要素を視野に入れて、総合的にモンゴル羊と羊毛を考えなければならない。

III 「良質な毛」とは

前章では、内モンゴルにおける在来種羊の外部形態の共通点を取り上げたが、本章では、中国の牧畜学および繊維学による研究成果を通じて、モンゴル羊毛に含まれる繊維の種類とモンゴル羊毛の特徴を明らかにしたい。具体的には、本章は羊毛という繊維の一般的な説明からはじめ、野生羊から多種多様な家畜羊までの毛の変化を考察する。

「良質な毛」について、芝田(1957)には、「梳ったものは抓毛又は梳毛と呼び良質なるも産量が甚だ少い」という説明がある。この良質な「抓毛」が何であるかを明らかにすることは、モンゴル羊毛の品質について再評価するためにはきわめて重要な点となる。

満洲日日新聞1918年2月1日の新聞記事「蒙古羊毛品質」の内容によると、

「春季清明の節に至れば 鉄製の爪子を用いて抓取りたるものにて 長さは套毛に及ばざるも 細織にして品質良好なり 之れには生羊より抓取せるものを散抓毛といい 羊皮よりとれるものを皮抓毛という 又抓取の際 右手□鉤子を持ち 左手を毛を受けて 手に満れば両手を以て堅く丸めて一塊となし 羊毛の一端を以て緊縛投出せるものにて 掌中の最良毛は外面に表れ 粗毛は内部底部に匿るため 一見頗る良品の観を呈するものあり 之を爪子毛と称す 又皮子毛とは爪子毛の外部に在る細毛を選みたる最優良品なり 但し一般に優良品を挽子毛と称することあり」

と説明されている。要するに、「良質な毛」としての「抓毛」とは、羊毛を太い毛と細い毛に手と道具で分ける作業によって取れた羊毛である。以上の内容から見ると、モンゴル羊毛とは、少なくとも太い毛と細い毛の2種類の毛が存在することが理解できる。

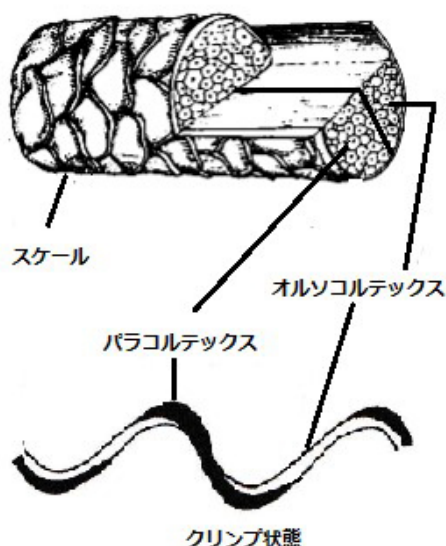
1. 羊毛繊維とは

羊毛とは羊から刈り取った繊維で、一般的にウール(wool)とも言われている。英語では、wool = 羊毛とは限らない。他にアンゴラ繊維、アルパカやラクダの毛も含まれているからである。羊が人間生活の中で占める位置が大きくなるにつれて、本来多種の動物の毛を意味した「ウール」が羊の毛だけを意味するような存在になったのである。

羊毛は優れた吸湿性や撥水性、弾力性、保温性を持つ繊維である。図1の「羊毛の構造」が示しているように、羊毛の外側はスケールという鱗片状のものに覆われ、水気をはじくと同時に湿気を吸う。つまり、撥水性と吸湿性という相互矛盾な性質を持っている。羊毛の内部には、パラコルテックスとオルソコルテックスという化学的構造の違う皮質組織がお互い組み重なっている。二つのコルテックスは、空気中の温度や酸、アルカリに違う反応をするため、羊毛繊維が弓なりに縮み、反転しながら伸びていく。このような捲縮状態は、クリンプ状態といわれ、羊毛の弾力性と保温性はクリンプ状態と直接関係している。また、羊毛には空気を浄化する機能があり、燃えにくい、染めやすい、色落ちしない、紡ぎやすい、しわになりにくい、型崩れしにくい特徴があり、毛刈りによって毎年収穫できる持続可能な繊維でもある。

欠点について、本出(1988)によると、動物性繊維であるため虫やアルカリに弱く、毛織物製品は洗濯することによって縮み、糸がほつれにくくなる。縮んでは困る衣料品にとっては、フェルト化はその欠点の一つであると言えよう。

図1 羊毛の構造



出所：本出(1988: 八巻)(1995)を参考にして作成。

2. 野生羊に近いモンゴル羊

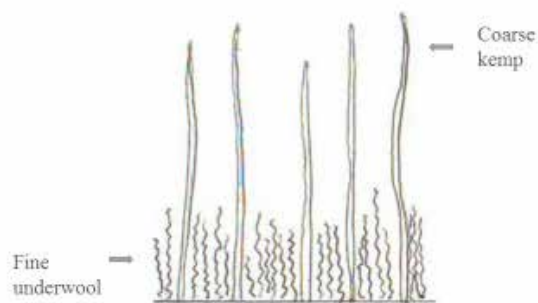
以上の2つの羊毛の構造以外にも、毛によっては中心髄質という第3の構造を持つものもある。髄質について、ライダー(1980: 15)は以下のように述べている。

「太い毛だけが髄質を持っている。毛が太ければ太いほどなかの髄質の直径が大きくなる。……髄質の構造は皮質の構造ほどにはよく知られていない。最も太い髄質は格子型とよばれるもので、内部は、気体のつまった空間をケラチンでできた支柱が格子状に仕切っているつくりになっている。この種の髄質は、ヤギやヒツジやシカの外被として生える粗毛にみられる。」

野生羊被毛の構成は、図2が示しているように、coarse kemp と fine underwool で構成されている。「coarse」と「fine」は形容詞であり、太くて荒い毛は「kemp(ケンプ)」と言い、細くてやわらかいのは「underwool(アンダー・ウール)」と言う。ライダーによればケンプは、つまり山羊や羊や鹿の外毛であり、広い格子状の髄質を持つ。細かいアンダー・ウールは髄質化していない。

Zeuner(1963: 198)によると、羊毛の利用が始まったのは、羊毛が大きな塊となって抜け落ちるのを人間が初めて発見したときからであると推測することができる。角田(2009)は、この毛の抜け落ちることを「換毛」と呼んだ上で、この特徴が野生羊のものであり、アジアの在来種羊にはこのような特徴がみられるが、高度に改良された現代の羊にはほとんどこの傾向が見えないとしている。モンゴル羊にはまだ「換毛能力」が残っており、このような意味において、モンゴル羊は野生羊、つまり、原種に近い品種とも言える。

図2 二種類の毛を持つ野生羊の被毛



出所：Ryder(1983: 16)より作成。

3. モンゴル羊毛の繊維タイプ

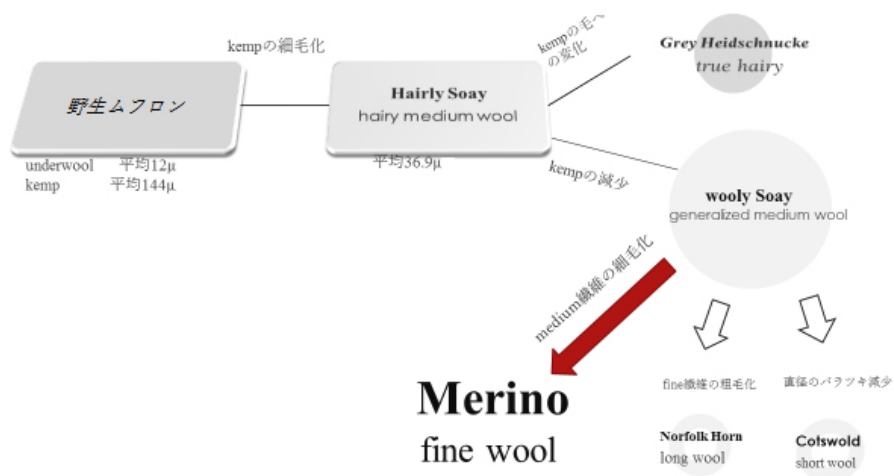
ライダー(1980)によると、羊は家畜化されていくことによって、野生羊の2種類の毛から、2つの進化の方向へ変化していく。一つの方向は、粗毛が細くなって、さらにより細くなり、メリノ種羊に見られる繊細な羊毛タイプや羊毛の直径範囲が $20\mu\sim 30\mu$ にせばまることによってできあがったショートウールタイプ、直径が $35\mu\sim 40\mu$ までfinewoolの繊維が太くなることによってできあがったロングウールタイプに変化する。つまり、繊維の直径と長さの変化である。もう一つの方向として、異型毛という第三タイプの毛の繊維が発達し、人間の選択的育種の産物である完全に新しい毛のタイプに変化する。

本節では、この2つの進化の方向を考察し、羊毛の主な繊維タイプに基づいて、モンゴル羊毛の繊維タイプおよびその特徴を考える。

(1) 「細毛化」プロセスによる換毛能力の喪失——野生ムフロンからメリノ種羊まで

Ryder (1983) によると、野生羊の毛皮は2つのタイプの毛からできている。家畜化された羊は、さらに野生羊の2種類の毛から変化していく。羊の毛は、今日のメリノ種に見られる繊細で、均等な直径と長さを持つ繊維になっていくと同時に、羊自体が換毛能力を喪失するに至る。図3は、換毛能力のある野生羊から換毛能力のないメリノ種羊への変遷様相の推定を示している。野生羊のムフロンでは、kemp(上毛)の繊維直径が平均値144 μ であるのに対して、underwool(下毛)は12 μ となっており、差が著しく見られる。Kempの細毛化に伴い、hairy medium woolの段階の代表である hairy soay 羊から、kempが喪失する。そして、hairy soay 羊が wooly soay 羊となり、さらに3種の long wool や short wool、fine wool の羊に変化する。その fine wool の代表がメリノ種 (Merino) である。

図3 野生羊から家畜化過程による毛質の変化



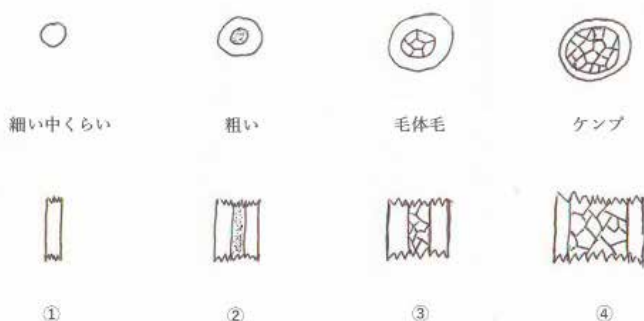
出所：Ryder (1983: 46) の「Fig.2.6 Changes in fleece type during the domestic evolution of the sheep.」より作成。

(2) 異型毛の繊維への進化

ライダー (1980: 53) によると、異型毛という名は、夏と冬とで毛のタイプが変化することからつけられた。図4は羊の主要な繊維での切片標本であり、細さと髄質状態の違いによって、羊毛繊維がこの四つに分けられている。

異型繊維は太い先端部と細い基底部をもつため、針毛とよばれることもある。夏には毛の繊維が髄質化して粗毛のようになるのに対して、冬になると毛の繊維は細くなり、毛髄質を失って、繊細な羊毛のような外観で成長するようになる。異型毛の特徴は、毛 (1989) によると、髄質のある部分と髄質のない部分の両方を、一本の毛の中に備えていることである。

図4 羊の主な繊維タイプ



出所：ライダー（1980: 52）の図18「ヒツジの主要な繊維での切片標本」より作成。

1937年10月号の『日本畜産学会報』に収録されている「支那山東省産羊毛に就いて」という研究報告（中原・林 1937）では、山東省産の羊毛を、当時の中国の他の地域の羊毛、特に脂尾羊種のもの、つまり「カーペットウール」に比較している。同時代の先行研究である佐々木（1936）において、モンゴル在来種羊の毛を「カーペット種」と呼んでいることから、中原・林（1937）における「カーペットウール」は、「蒙古種」羊の毛を指すと推測できる。この「カーペットウール」つまり太い毛が多く存在している羊毛には、「緬毛」、「粗毛」、「粗緬毛」3種類の繊維があると結論が出ている。中原・林（1937）によると、「粗緬毛」とは「緬毛」と「粗毛」の中間に位するもので、semicoarse wool 或いは hairy wool と呼ばれている。また、本出（1988）によると、動物の毛は大きく3つに分けることができる。すなわち、①太くてまっすぐな毛＝外毛・ヘア（hair）。②やわらかくて細い毛＝内毛・産毛・ウール（wool）。③固く太く中心に毛髄質のある繊維＝ケンプ・メデュラ（medulla）の3種類である。なお、中原・林（1937）と本出（1988）の研究において、異型毛に関する言及はない。

(3) モンゴル羊毛の繊維タイプ

本節では、羊毛繊維のタイプに関する考察に基づいて、また、中国における在来種羊の繊維タイプに関する研究を参考にして、モンゴル羊毛の繊維タイプについて考えたい。

王・劉（2006: 143）の研究によるとフルンボイル種の毛の色については、多くは体の部分が白く、足の部分に斑がついているものが多く見られ、頭部、特に目の周りに、サングラスのような黒色や茶色の毛を持つ牝羊は、このような遺伝的特徴を次の世代に残す傾向が強い。この特徴を持つものは、特に冬季雪のある寒い地域に適応する能力が極めて強い。バルグ種羊の太い毛の量は一般のモンゴル羊より多くなっている。しかし、羊毛に太く荒い毛が多く含まれている羊は、自然適応性が強く、体格がより強固で、肉の生産量が高い。現在、中国のフルンボイル地域では、羊毛のための品種改良を行うよりも、他の優良な特徴を保持することが重要であると王・劉（2006: 143）が主張している。李宏図・秦秀娟（2006: 148）によると、短尾種の被毛の各類型の繊維の比率は：「絨毛」（髄質のない細い毛）率が53.49%、「両型毛」（異型毛）率が6.03%、「有髄毛」（髄質のある太い毛）率が40.48%である。

ウヅムチン種の場合、牡羊は、「絨毛」率が46.34%、「両型毛」率が1.63%、「有髄質」率が52.03%で、

そのうち「死毛」⁷⁾の比率が30.6%である。牝羊はそれぞれ54.58%、2.68%、42.74%で、「死毛」率は9.46%⁸⁾。ソニド種の羊毛は、髓質のない細い毛が52%～61%、異型毛が3%～4%、「死毛」を含まない髓質のある太い毛が8%～11%、「死毛」が28%～33%を占めている⁹⁾。

以上の研究によると、モンゴル羊毛には、四種類の毛が存在する。つまり、髓質のない細いウール、異形毛、髓質のある太い毛、死毛である。

本章のテーマである「良質の毛」とは何かについて、以下のように主張することができる。モンゴルの羊は、野生の羊と同様に、春から夏にかけて毛が抜け落ちる。これは「換毛能力」とよばれ、現在のヨーロッパで毛のために改良された羊のほとんどは、その能力を喪失している。要するに、モンゴル羊は、「毛が自ら抜け変わる」という能力をもつがゆえに、ヨーロッパの羊に比べて野性に近い品種であると判断できよう。

モンゴル在来種羊の毛は、細くてやわらかい髓質のない繊維、異型毛の繊維、髓質のある太い毛の繊維と「死毛」で構成されている。「太くて粗い」という言い方は、実際には一種類の毛ではないことがわかる。また内モンゴルの3種類の在来種羊の細くてやわらかい毛の比率が、平均的に羊毛繊維全体のおよそ半分を占めていることを、無視することはできないであろう。つまりこの細くてやわらかい毛は「良質の毛」である。異型毛はわずか2～3%であり、「死毛」、つまり太くてまっすぐな毛と髓質のある太い毛が残りのおよそ半分を占めている。

羊毛繊維に関する用語は、以上の複数研究の中でそれぞれ異なっている。Ryder (1983)の野生羊の「ケンプ(kemp)」と呼ばれるものは、モンゴル羊の「死毛」とどのような関係を持つのか。そして、本出(1988)は、毛髓質のある繊維を表すために「ケンプ」という言葉を使用している。また、本出(1988)の分類した動物の繊維タイプを参照すると、①の「太くてまっすぐな毛＝外毛・ヘアー」と「死毛」の共通点は、まっすぐであるところにあり、両者は同じ種類の繊維かどうかは不明である。モンゴル羊毛に含まれる「死毛」と「髓質のある太い毛」を二種類の「ケンプ」と呼ぶか、それとも「外毛・ヘアー」と「ケンプ」と呼ぶか。さらに、モンゴル羊は野生羊に近い品種であるゆえ、野生羊の「ケンプ」まで持っていると言えるかどうかは、今後の課題として明らかにする必要がある。したがって、野生動物と家畜の間に立つモンゴル羊の「太い毛」に対する叙述は、単に「ケンプ」という用語だけでは不十分である。

4. カシミヤ生産技術の導入による「綿羊絨」の誕生

「良質な毛」としての「抓毛」は、手と櫛のような道具を使って入手できることが、前述の戦前日本における多くの資料で紹介されている。羊の体を梳かす作業が実際に存在していたことは、戦前の研究によって明らかになっている。この作業にカシミヤ生産機械や技術を導入することによって、大量生産が可能になったのである。

2002年9月20日の「中国紡織報」の1つの新聞記事によると、1995年中国河北省の農民、史跃蕊

7) 死毛とは、繊維が薄く平らな状態であり、白い、光沢がない、まっすぐになっている毛である。ごく一部曲がりくねるものも含まれる。髓質が連続性をもち、長さが25mmまたはそれ以上のものを指す。(中華人民共和国国家標準 GB/T 14270-2008 毛絨繊維類型含有量テスト方法 Test method for fiber type content of hair fibers)

8) 重慶市牧畜科学院 牧畜知識ベース <http://bk.xumu001.cn/index.php?doc-view-2887> (最終閲覧：2017年1月13日 1:44)

9) ソニド左旗人民政府認証サービスプラットフォーム ソニド羊トレーサビリティ認証プラットフォーム <http://www.sntny.com/viewarticle.aspx?id=343&type=snt> (最終閲覧：2017年1月13日 1:53)

がカシミヤ分櫛¹⁰⁾の技術を羊毛生産に応用し、在来種羊の毛から「綿羊絨」を引き出すことに成功した。その技術をセーター製品の開発に利用したところ、市場の反応はとてもよく、非常に大きな利益を得たという。その後、カシミヤ分櫛技術を羊毛に導入することが当時彼の住んでいた黄金庄村に広がっていく。鄭文新・王楽(2009)によると、2009年の時点で、この産業は河北省に限らず、内モンゴル、江蘇省、上海、青海省、新疆などの地域に広がった。そのうち、価格が最も高いものは、1トンあたり120万元であった。その原料は主に内モンゴル産である。

趙(1997)の研究によると、実は、1986年の時点で「綿羊絨」という繊維に関する報道が存在している。河北省の東高集団という有限会社が、史跃蕊よりも前に、800万元(1億2,000万円程度)を「綿羊絨」の生産・加工の研究へ注ぎ込み、北京紡織科学研究所などの協力の下、「綿羊絨」製品を開発している。

「綿羊絨」という言葉に対する統一された英語の表現はない。たとえば、「Sheep Down」(鄭・王など、2009)、「True wool」(劉1995)、「underfleece of sheep」(王・潘・王1998)。また中国国内には、この種類の繊維を「絨」と呼ぶのか「毛」と呼ぶのかを巡る議論が行われている。「絨」とは動物の細くやわらかい産毛のことであり、つまり野生羊の「underwool」にあたる言葉である。

直径の比較から見ると、カシミヤの中国国家基準(GB18267-2000)によると、カシミヤは、「山羊から採集した直径が25 μ またはそれ以下のもの」と定義され、ヤク絨は35 μ またはそれ以下のもの(GB/T 12412-2007)、ラクダ絨は40 μ またはそれ以外のもの(GB/T 21977-2008)、と定義されている。

劉(1995)、王・潘・王(1998)の実験結果によると、モンゴル在来種羊の毛の細いものは、直径14~25 μ に集中している。こういう意味で「綿羊絨」という言い方にはある程度の合理性があると考えられる。しかし、羊毛の「絨」に関する国家基準がいまだに存在しない。その一つの重要な理由として、鄭・王・張(2009)は、「絨」として認証した場合、「ヤギ絨」つまりカシミヤと混同しやすいため、カシミヤ市場に混乱をもたらす可能性が高いと主張し、モンゴル在来種羊の細い毛がカシミヤと混同されやすい品質をもっているが、スケールの形態や重ね方、構造の面でまったく違う繊維であり、光沢と手触りも違うと述べている。

在来種羊の細い毛をどのように扱うかについてまだ議論が続く一方、機械技術が発達していない時代と異なり、太い毛と細い毛とが分けることができる現在ではモンゴル羊毛は繊細な繊維としてこれから非常に高い可能性をもっている。繊細な毛の割合はモンゴル羊毛の半分またはそれ以上を占める。これがモンゴル羊毛の新しい発展の道につながり、羊を飼っている牧民の経済生活にも役立つことは考えられる。

メリノ羊毛の品質と産毛量は機械での大量生産にとって最も効率的である。モンゴル羊毛は全面的なメリノ種羊の代用品とはなり得ず、ファインウールはカシミヤとどう差別化するかという問題はあがるが、繊維としての可能性は十分あると考えられる。

戦前戦中の日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の背景には、当時の日本羊毛産業が羊毛の自給を図る中、「メリノ種の代用品」という考え方があり、効率問題は常に評価の基準として羊毛産業や畜産業にとって重要だった。効率の文脈上、モンゴル羊の産毛量はメリノ種羊より圧倒的に低く、繊維の長さも人間が長期的に力を入れ改良したメリノ種羊の統一性に及ばないが、これらの基準には機械生産が背景としてあることが無視できない。戦後、当時内モンゴルで羊毛関係の仕事を従事している人々が帰国し、モンゴル羊と羊毛に対する研究もそのまま日本国内の羊毛業界に受け継がれたと考え

10) 原毛中に混在するうぶ毛と粗毛を分離し、うぶ毛だけを取り出す作業である。

られる。「綿羊絨」という繊維は現在日本羊毛業界にあまり知られていない。

IV 羊と羊毛の利用目的から考える評価基準

前章において、モンゴル羊毛の「良質な毛」を分析した。モンゴル羊毛は繊維として可能性を持っている。しかし、羊の利用は、家畜化の長い歴史の中、羊毛に限らず、乳肉や内臓、毛皮、骨、角、糞に至るまで遊牧民にとって必要な産物である。羊が衣食住さまざまな面で人間生活を支え、羊毛の利用も実は多様であることが無視できない。現在の内モンゴルのモンゴル人の日常生活のあらゆるところに羊の文化が浸透している。モンゴル羊毛に対する評価は、評価する側がどんな立場に立って羊毛をどう利用するかによって違っていく。本章ではモンゴルの伝統的遊牧生活における羊毛利用に着目し、日本における現行評価形成の原因を分析することによって、モンゴル羊毛に対する毛織物生産基準以外の評価の仕方を探る。

1. モンゴルにおける遊牧民の羊毛利用——フェルト（エスギー）

日本は古代より麻・絹・綿の伝統的な服飾文化をもっているが、羊毛工業の発足から現在までの歴史はわずか120年余りといわれる。家畜文化が欠けている背景のもと、すべての動物の毛を「毛」という言葉で表現し、羊と羊以外の動物の毛をはっきりと区別しない。それに対して、ヨーロッパまたはユーラシア大陸においては、羊と羊以外の動物の毛を異なる言葉で表現し、異なる扱いをしてきた。たとえば、モンゴル国では、羊とラクダの体から刈り取った毛を「ノース」、牛と馬から刈り取った毛は「フーブル・ヒャルガス」、ヤギの体からとった毛を「ノーロール・ヒャルガス」と言い方を区別している。このような区別は、遊牧生活における毛のさまざまな用途から生まれる。各種の家畜の毛はどのような特徴をもち、どこに利用するのか、どんな使い方に適応しているかについての遊牧民の知識や技術から誕生したとも言える。

明治維新以前の日本では、牛や馬、豚に比べて、羊とのかかわりが極めて少なかった。江戸中期から明治時代にかけて、羊毛の毛織物が日本に輸入され、一般人もこれを着用するようになったが、羊の毛で作られているという紹介や解説を欠いており、ただ単に「羅紗（ラシャ）」、「サージ」などと呼称されていた。「羅紗」という言葉の語源はポルトガル語の「raxa（厚手の毛織物）」を元とする。漢字の「羅」とは「薄い絹織物」の意味で、「紗」とは「薄絹」を意味する。どちらの漢字も原語である raxa には結びつかない意味を表している。当時の日本人が、羅紗が羊毛製であると認識していなかった理由の一端はこのことに求められよう。

1870年には兵制が確立し、陸軍、海軍軍服はすべて羅紗を用いることが決められていた。その後、婦人服として毛織物が急速に普及するようになった。山根(1989)によると、サージやセルの実物は、日本にも入って来ていたものの、実はどちらも羊毛からできているものとしては日本人に感覚的に理解されていなかったという。

日本の風土と農耕文化の中、麻、絹、木綿などの素材が日本では主に使われていた。自然環境から見れば、明治時代の日本人には牧草及び牧場などは身近なものではなく、牧畜文化は日本に根付かなかった。本稿では、戦前および戦時中の多数の研究を参考に、日本人、あるいは日本の羊毛業界、畜産業界がメリノ種羊に特にこだわっていた理由を、羊毛で絹の様な生地を生産しようとしたからであ

ると考える。繊細な絹の代用品として用いるには、モンゴル羊毛は不適切なのである。

日本と違う風土であるモンゴル高原の遊牧民の暮らしにおいて、羊毛の利用は毛織物ではなく、フェルトとして主に使われてきた。1924から1925年にかけて、モンゴル人民共和国の首都ウランバートルとロシアのキャフタのほぼ中間地帯に、匈奴の王のものとされるノイン・ウラ古墳群が発掘され、その中には古代衣服の標本が含まれていた。衣服は、男子の単衣(ひとえ)と袷(あわせ)の絹製長衣2着、錦・絹・毛織物製の脚衣各1着が発見された。袷とは、単衣を重ね合わせて着る長衣であり、表と縁の部分は中国製絹布、裏は0.5cmのフェルト生地で作られていた。毛織物製の脚衣は匈奴の末裔といわれるカザフ族の19世紀の羊の皮脚衣とほぼ同寸法である。毛織製脚衣は皮脚衣を祖形として製造されたと考えられ、この皮製脚衣の脚部は左右各一頭分の羊の皮が使われ、脚衣の上端は羊の首に近い部分の皮で、動物の体形をいかして作られている。この発見から、モンゴル高原で暮らしていた遊牧民が紀元前後すでにフェルトの服を着るようになっており、毛織物のズボンも履いていたことがわかる。現在「モンゴル」という地域で暮らしている「モンゴル人」といわれる人々は、数千年の東西南北の民族融合で形成された民族だと考えられる。衣食住のすべての面で羊の畜産物に恵まれているという点で、イギリスに共通する部分も指摘できるが、モンゴルにおける羊毛が毛織物ではなく主にフェルトとして使われている点が大きく異なる。つまり、遊牧という暮らしの形態がフェルトを選んだと考えられるのである。

羊毛で作られたフェルト製品は、モンゴルの遊牧生活において不可欠なものである。フェルトはモンゴルの遊牧生活から生まれ、遊牧生活に一番適するテキスタイルである。Sjöberg (1994; translated by Spark 1996: 23) は、フェルト製品がモンゴルの遊牧生活に適している理由として、まずは羊を人間の手で管理し、その産物としての羊毛を簡単な道具を用いて、短い時間で集中して作ることができることを挙げている。さらに、Sjöbergによれば、フェルトがある程度の厚さと品質を持っているために、様々な需要に対応することができることや、その厚さのためにゲルの外側に防風材として使われること、また、フェルトの中で薄く柔軟なものが靴下等に使われることも理由の一部であるのではないかとされている。

ゲルに使われるフェルト製品は、ゲルの壁のような面積の大きいものと、座布団やブーツなどの小物に分けられる。フェルト作りは、ものづくりでありながら、祭りとも言えるものであり、儀式としての重要な役割をも果たしている。フェルト作りを通して、共同体の中で、祭りを楽しみ、宴を開くのである。

内モンゴル自治区内もモンゴル国内も、伝統的遊牧生活が行われている地域は、以上のようなフェルト作りの文化を持っている。このようなフェルト作りの具体的な製作プロセスに関しては、内モンゴルとモンゴル国において数多くの研究が行われている。モンゴル国出身のバ・エルデネツェツェグ (2009) の研究が、その中では、より詳細なものであるため、本研究では主にバ・エルデネツェツェグ (2009) の研究を参考にし、以下に整理する。また、近年、内モンゴル自治区においては、伝統的遊牧生活が行われる地域がほとんど存在しないため、最新の研究成果として、2015年8月に今岡良子と本出ますみによって行われた、モンゴル羊毛に関する現地調査(モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域)時に撮影した写真を通じて説明する。

毛刈り (Shearing)

羊を敷物あるいは防水帆布の上に倒し、2本の前足と1本の後足をロープで結び、脚→胸→体の順

番で刈り取る。羊毛を汚さないように、また無駄が出ないように心掛ける。

羊毛叩き (Stick-beating)

羊毛を天日の下に広げて、汚れの塊などを取り除き、湿気をなくす。そして、なめした牛皮の敷物の上に乾いた羊毛を敷き、端から叩く。この作業は、羊毛をほぐすために行うものであり、一回で3、4kgの羊毛を叩くことができる。ゲル用フェルト一枚分、すなわち約25kgの羊毛を作るには、このような作業を6、7回行う必要がある。叩き棒としては、白樺や柳で作られたものが丈夫で、この作業に最も適している。

叩く人はお互いに向き合って座り、棒の先に羊毛繊維が引っかからないように気をつける。よく叩かれた羊毛は、重ね敷きしやすく、ほこりがついていないため、上質なものになる。

フェルト化 (Feltmaking)

ほぐした羊毛を両手で引き伸ばし、繊維を同じ方向にそろえて母フェルト (mother felt) に敷く (cf. 写真4)。その上に水あるいは乳清などをかける (cf. 写真5)。カラマツ、白樺などで作られた木の軸を、敷かれた羊毛の上に置き、端から巻き上げる (cf. 写真6)。さらに、フェルト全体を牛の生皮で覆う。朝の涼しいうちに、それらを馬やラクダなどの家畜に引かせ、1.5–2kmの距離を、20回から30回走らせる (cf. 写真7・8)。そして、昼間の暑いときさらに15回から20回程度走らせる。最初はゆっくり引っ張り、水分が大分出て軽くなったら、家畜の走るスピードを上げる。

一枚のフェルトが完全に出来上がるためには、このような作業を3回繰り返さなければならない。この作業が繰り返される中で、1回目に出来たフェルトは「乙女フェルト」、2回目にできたものは「英雄フェルト」、3回目のものは「母フェルト」と呼ばれている。

写真4 母フェルトに羊毛を置く



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影(ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>)

写真5 乳清をかける



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>）

写真6 羊毛を巻き上げる



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>）

写真7 フェルトを引っ張る (1)



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>）

写真8 フェルトを引っ張る (2)



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>）

写真9 形を整え、さらにフェルト化する



出所：モンゴル国ウブスハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 <https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/>）

また、フェルトの上に刺繍（シルデグ）を重ねて、ゲルの中のカーペットやベッドの上の敷物などに使うものを製作する。刺繍によって、フェルトはさらに丈夫になり、長持ちするようになる。楊(1996)によると、フェルト作りは、儀礼を伴う共同作業でもある。作業が全て終了した後、主人は宴会を開き、手伝いに来た人々に羊肉の料理をご馳走する。また、フェルトを大量に作った場合には、リードしてくれた人に主人がフェルトのお礼を渡し、作ったフェルトの枚数が少ない場合には、前年に作った比較的美しいフェルトあるいは羊1頭分を献上する。母フェルトが他の家から借りたものであれば、返すときには必ず羊の胸肉をお礼として相手に贈る。

フェルトはモンゴルの遊牧民の生活にとっては、不可欠な生活用品であり、また遊牧生活における共同体内部の人間関係作りに積極的な意義を持っている。毛織物生産の観点から離れてみても、モンゴル羊毛は、雨風から人間の命を守り、多数の道具を必要とせずに、もっとも実用的で移動生活に適する素材である。近年、日本におけるアスベストを含む建築材の問題解決として、自然素材の導入への需要が高まりつつある。モンゴル羊毛の建築用断熱材としての活躍も期待できよう。

2. 伝統的遊牧生活の中の羊利用

前節では、毛織物生産とフェルト作りの視点からモンゴル羊毛を改めて評価したが、いずれの評価においても、羊毛を「資源」、つまり「もの」と見なしてきた。平時と戦時の資源利用には根本的に違いがある。日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の背景には、戦争があることを無視できない。本節では、モンゴルの伝統的な遊牧生活と戦争がそれぞれモンゴル羊に求めたものを比較し、持続可能性の観点からモンゴルの羊毛を改めて評価する。

羊からの畜産物は遊牧民に利用されるが、それらは実際に単純な「もの」とされるのではなく、人間

と家畜との間には深い歴史的・文化的・経済的な絆が存在している。日本におけるモンゴル遊牧社会の畜産関係の研究は、地域研究の分野で多く蓄積されている。その中、内モンゴルに関しては、戦前および戦時中の現地調査が非常に多く存在している。しかし、これらの研究の内容は、当時の政治的・社会的情勢において地域研究としての限界が見られる。本研究が考察した範囲内では、人間と家畜の關係に着目したものの数が少ない。モンゴルの「伝統的遊牧生活」と言っても、内モンゴル自治区とモンゴル国両者の間には、さまざまな相違点があり、また、内モンゴル自治区内でも地域ごとに多様性を持っている。

小貫(1985)によると、モンゴル国ブルド地域は、モンゴルにおける遊牧の典型的な地域であり、モンゴル民族の発展史上、古い時代から重要な役割の一端を担った地域でもあった。小貫(1985)がブルド地域を調査対象にした研究は、詳細なものであり、参考とする価値が高いと考えられる。したがって、本研究は、小貫(1985)の研究をベースにし、冬営地—春営地—夏営地—秋営地という遊牧生活のサイクルに沿って、遊牧民の羊利用について説明する。

冬営地 (11月～3月)

この時期羊に関する生産活動は、11月から12月にかけての食肉用羊の屠殺・貯蔵作業と2月から3月にかけて仔羊分娩・育成の仕事が中心に行われる。

11月から12月にかけては、羊が最も肥える時点であり、また気温も大分下がることから、羊を屠殺し、冷凍して保存する。これは、1年において最も楽しい行事である。この時期には、脂肪の多い羊肉をよく食べる。骨付きの羊肉を茹でて食べることを遊牧民は好む。羊の肉だけでなく、羊のミルクを加工した乳製品なども一緒に長い冬の間に大切に消費していく。夏より、冬の食事は圧倒的に肉が多い。

長谷川(1996)によると、モンゴルにおける屠殺の方法は、イスラム系遊牧民が用いる「頸切り」方法ではなく、羊・山羊のような中型家畜に対して「腹割き」方法が使われる。この方法は、モンゴル語では「オルルフ」と呼ばれる。小刀で胸部を少し割き、手を突っ込み、人差し指と中指で心臓近くの大動脈を切断し、羊が痛みを感じないうちに即死させる。

畜肉以外にも、内臓や毛皮、骨などの産物も、衣服や生活用具などに使われている。ゲル(天幕)の中の革紐や家畜の毛で作った縄類、牧畜用の鞭、投げ縄、馬取り縄類、羊のくるぶし骨で作った遊び用の「シャガイ」と将棋(シャタル)、楽器、羊や山羊の膀胱を加工した火薬入れなど、幅広い分野で活用されている。

2月下旬頃から仔羊が生まれ始める。羊はマイナス30度程度の寒さの中で出産する。厳しい自然条件のなか、寒さで仔羊が死なないように、細かい手間をかけて命を保護する。遊牧民はこの時期、徹夜で寒風の中ランプを照らして仔羊を見張るのである。

春営地 (4月、5月)

冬営地の周辺の枯れ草はほとんど食い尽くされ、家畜は痩せている。この時期にはまだ積雪があり、枯れ草の残された新しい牧地を求めて春営地に移動する。5月に入ると、山羊の毛刈り作業を行い、母羊の搾乳作業もこの時期から行い始める。子羊と母羊と一緒に放牧すると、仔羊が母羊のミルクを全部飲んでしまうため、子羊と母羊の群れは別々に分けて面倒を見る。人間が生きていくためには、どうしても家畜から肉やミルクをとらなければならない。しかし、長期的に家畜の恵みで暮らしていくためには、家畜を増やしていかなければならない。そこで人間は、母羊のミルクを仔羊と分け合い、

人間と家畜のバランスをとるための知恵を、長い歴史の中で身につけてきたのである。

夏営地（6月～8月）

6月初旬には、夏営地に移る。この時期は、家畜の食べる草の量が豊富であり、家畜の泌乳が盛んになる。羊を搾乳し、ミルクの加工や乳製品作りの仕事をする。羊を搾乳するときは、母羊をロープで羊の頭を交互入れさせる形でつないで行く。絞ったミルクは加工され、冬の食用のために保存される。モンゴルの乳製品は、静置、クリーム分離、調合、加熱濃縮、発酵、攪拌、蒸留などさまざまな処理工程の組み合わせで、保存性の高い製品に出来上がっている。

秋営地

9月初旬、草の多い牧地を求めて、移動の回数を重ねていく。山羊と羊の交配がこの時期に行われる。冬に使う燃料として、羊と山羊排泄物で出来上がったレンガ状のものを集めて、越冬の準備をする。そしてまた冬営地に移動し、冬の生活が再びはじまる。

羊毛がモンゴルの伝統的な遊牧生活でどのような位置を占めているのかを整理しておこう。遊牧民は羊毛だけのために生産活動を行うのではなく、羊に関して利用できる全てのものを無駄が出ないように利用している。中国や日本の畜産業における多数の研究において、このような伝統的な遊牧生活の中の家畜飼育活動は、「粗放」的、あるいは「原始的」と説明されている。しかし、このような遊牧生活は、「移動」と「定住」の相違を前提にして、それぞれより妥当な方法で評価されねばならない。伝統的な遊牧生活では、「移動」という方式によって牧地の生産力を保ち続けることに重点がおかれているが、現代の畜産業では、畜肉と羊毛を資源として捉え、その規模を無限に拡大することに重点が置かれている。両者はそもそも出発点からして食い違っているのである。また、現代の畜産業のように、羊の畜産物を単純な「資源」として搾取することは、過放牧の状態を引き起こし、結果として、環境問題に繋がり、最終的には牧地を喪失することになりかねない。

3. 羊毛と戦争

日清戦争直後から、日本国内経営は大陸における海外市場を目標として進み、このような好景気は毛織物工業に大きな発展をもたらした。ダイヤモンド社編集(1967: 48)の『ウール・羊とウールと人間』によると、明治29年には原毛輸入税が撤廃され、日本羊毛工業は日露戦争を経て、第一次世界大戦中、軍需産業として発展した。「戦争景気」は羊毛工業に限らず、産業界一般において長続きするものではなかった。戦争が終結に向かうと、羊毛工業界は不況に陥った。しかし、第二次世界大戦の軍需拡大による日本羊毛工業の発展は、再び「ヨーロッパ先進羊毛工業国と肩を並べることができるようになった」。

当時の日本政府は羊毛資源の自給を目的とし、満洲と蒙疆地域で在来種羊の改良事業を国策として以前より積極的に取り組んだ。中生(2000)によると、1937年の盧溝橋事変後、日本の繊維製品の輸出は第三国に向けて盛に奨励され、綿製品の国内使用を禁止するほどにまで海外への輸出に力が入っており、国防上必要な物質を購入していた。関東軍が張家口を占領し、二回改組によって、1939年蒙古連合自治(蒙疆)政権が設立され、日本人の顧問が実質的権限を掌握し、日本軍の統治下におかれた。このような背景の下、対内的な政策として、牧畜の技術革新による増産が重要になった。

さらに角替(1944: 297)によると、日中戦争勃発以前の貿易相手は英米と日本の植民地であり、欧

州戦争の始まりによって、ドイツとイタリアとの貿易が不可能になり、英米依存の傾向がますます強まってきた。また、角替によると、太平洋戦争による食糧不足を補うため、より一層食糧増産が強調され、この時期、英米は日本に対する貿易を全面停止させ、日本国内資源の輸出と国内への必要物資の輸入ができなくなった。1937年以降、繊維原料資源の輸入は軍需上必要な物資として輸入するため、国民の衣生活の最低限の需要を満足することすら容易ではない状況だったと角替は述べている。中生(2000)は、この時期、羊の品種改良、モンゴルの牧畜業の生産性を上げる政策の実行が求められていたと論じている。丁曉傑(2014)の日本の羊毛改良政策に関する研究によると、戦争のための軍需生産が、内モンゴルの牧畜業に大きな負担をかけた。また、オーストラリアから羊毛を輸入できなくなった結果として、日本は軍需物資のために羊毛生産と羊の改良を内モンゴルに押し付けることになったのである。

日本の羊毛工業が戦争に加担しながら自らの発展を遂げた一方、羊毛自給のためにモンゴル地域で強行した改良事業は、武見(1938)によると、自然的、技術的困難があるにも関わらず、モンゴル人の生活様式に変化を迫り、生活を悪化させたのであった。横堀(1932)によれば、日本の羊毛工業による改良事業によって、多くの羊の体が弱くなり、栄養不良で寄生虫が大量に発生していたという。当時のモンゴル人が求めていたものについて、横堀は、羊毛のための改良よりも、家畜を伝染病の流行から救うことであったと述べている。

遊牧民の羊利用と戦争目的の羊利用は対照的である。戦争をするということは、戦争を維持するために不要なものを、すなわち戦争にとって効率の悪いものをすべて排除することであって、戦争に役立つか否かということが、物事を評価する唯一の基準になっていく。モンゴルの羊と羊毛が、毛織物の産出だけを重視しているのではないことは、既に述べたとおりである。ここに、モンゴルにおける羊利用と、近現代の西洋で行われた羊改良との根本的な相違点が見えてくる。羊の肉やミルクが人間の食糧となることをはじめ、羊毛はゲルや敷物として活用されてきたフェルトとして人間を厳しい自然環境から守り、そして遊牧生活がモンゴル羊と羊毛の特徴を作り上げたといってもよいのであろう。

遊牧が「時代遅れ」で「原始的」であると指摘されてきたように、モンゴルの羊毛も「近代化」の大きな波に乗れなかったものとして一般的には理解されるのであろう。しかし、「近代化」の暴力性を無視してはならない。歴史上、家畜文化のなかった日本は、モンゴル羊に対して改良事業を試み、日本軍が敗北し、大陸から撤退することに伴い、改良事業も終焉を迎えた。その背後にあるものは、単純に技術の問題ではない。2016年のデータ¹¹⁾によると、内モンゴル自治区羊の年中総頭数のうち、在来種羊の頭数は8345.21万頭である。改良羊は、2980.61万頭である。羊を改良したところで、それを内モンゴルに完全に定着させることができないことがわかる。モンゴルの在来種羊は、家畜多様性と生態系の維持において重要な役割を果たすために、改良羊と完全に代替可能ではないこと、および現地の牧民が在来種羊の外見と習性に慣れていることが原因として考えられる。

V 結論

戦前や戦時中におけるモンゴル羊毛に関する研究は、当時の日本の畜産学や畜産業および羊毛工業の分野の研究者によってなされていた。毛織物生産を基準として、モンゴル羊毛は、「毛が太くて粗い、

11) 内モンゴル統計局ホームページ(最終閲覧:2018年5月28日18:00)

メリノ羊毛のように良質な毛織物に適さない」と評価されていた。そして、戦後日本とオーストラリアの羊毛貿易の回復によって、モンゴル羊毛は日本中の人々の関心から離れていった。当時の評価はそのまま残っている。しかし、モンゴル羊毛のすべてが「太くて粗い」毛で構成されている訳ではなく、その中の半分または半分以上に細い繊維も含まれている。技術の発展に伴い、カシミア生産技術が羊毛に導入された結果、細い毛だけを集めることもできるようになった。その毛は、繊細な工業製品の材料となる可能性を十分に有する。つまり、モンゴル羊毛は、毛織物生産を基準としても評価できる部分があるにも関わらず、日本においては十分な評価を得ていないと言えるだろう。

また、フェルトはモンゴルの遊牧民の生活にとっては、不可欠な生活用品であり、遊牧生活における共同体内部の人間関係作りに積極的な意義を持つ。毛織物生産の観点から離れても、モンゴル羊毛は、雨風から人間の命を守り、多数の道具を必要としないことから、もっとも実用的で移動生活に適する素材であると評価することができる。

しかし、戦争の背景のもとでは、羊毛は「資源」に変身し、戦争を維持するために不要なもの、戦争にとって効率の悪いものはすべて排除され、戦争に役立つか否かということが、物事を評価する唯一の基準になる。その結果として、持続可能性を失う危機にさらされる。遊牧民は羊毛だけのために生産活動を行わず、羊に関して利用できるすべてのものを無駄が出ないように利用する。「移動」という方式で牧地の生産力に配慮しながら、家畜・人間・自然のバランスをよくとることに持続性が見えてくる。そのような意味で、モンゴルの羊毛はより環境にやさしい、人間社会の持続性に配慮した素材として評価されるべきである。

おわりに

筆者自身、中華人民共和国内モンゴル自治区通遼市の「モンゴル族」家庭出身で、牧民家庭育ちでなく、幼稚園の後半から大学を卒業するまで中国語教育を受けていた。両親は二人とも学校教員で、「モンゴル語」で授業を行っていた。学校の合併により、父はこの十数年来、中国語の「普通話」で授業するよう求められている。両親の中国語はあとから勉強したもので、とても堪能であるとは言えない。そのような家庭環境の中で育った著者は、コミュニケーションをとる場合、両親とはもちろん「モンゴル語」で、また自ら半分強制されるかたちで家庭内や周囲の親友たちと「モンゴル語」で日常的な会話をしている。戸籍上「モンゴル族」になり、名前、言語、衣食住など非常に細かいところまで「モンゴル」というしるしがつけられている。民族のアイデンティティとは、都市生活を送り、中国語教育を受けてきた自分にとって、はっきりとしないものである。中国社会に存在する「遅れている民族」・「先進的民族」や「原始的」・「文明的」という対立から、自分たちの文化と歴史に対して数多くの疑問を抱いてきた。

しかし、モノは常にその民族集団の歴史と文化を伝える力を持つ。羊毛で作られた敷物は筆者とともに内モンゴルから北京まで移動し、大学の四年間、筆者を湿気や寒さから守ってくれた。日常的に羊と羊毛を利用することから生まれる、それらに対する愛着は「私はどこからきたのか」という問いに対して今まで答えを与え続けてくれた。そこから、モンゴルの羊と羊毛に興味を持つようになり、修士論文のテーマとすることまでに至ったのである。

本研究はあくまでも認識論的なものを提示したものであるが、西洋中心的な価値観や近代の価値観

から離れ、アジアや羊毛原産地としてのモンゴルの視点から羊毛を考える試みであった。それと同時に、本研究は、他者を理解するための試みでもあった。ノルウェー出身の平和学者、ヨハン・ガルトウングは、平和の対置概念とは、戦争ではなく、「暴力」だと提唱した。彼の言う「暴力」とは、「実現可能であったものと現実に生じた結果とのあいだのギャップを生じさせた原因」、つまり、各人の能力の全面的開花を阻害する諸要素を意味する。「直接的な暴力」以外にも、「構造的な暴力」や「文化的な暴力」もこの社会に存在していることを無視してはならない。本研究の発展的課題として、各種の「暴力」がモンゴルの伝統的な遊牧生活の中にどのような姿をとって現れるのか、モンゴルの遊牧社会にどのような影響をもたらしたのかについて研究したい。

来日してすでに五年間も経った。この五年間、今岡良子先生は、フィールドや普段の院生生活の中で筆者に惜しまず指導してくださった。また、フィールドワーク中に撮影したフェルト作りの写真を本論文に掲載させてくださり、心から感謝の意を申し上げたい。今岡先生を通じて知り合った、羊毛素材学専門の本出ますみ先生の著作『羊の手帖』は、本論文の執筆に際して、本当に重宝した。これからの研究も、地域の土台への理解を深め、地域に根ざしたものになればよいと考えている。

参考文献

〈英語〉

- Gunilla Paetau Sjöberg translated by Patricia Spark. (1996) *Felt : new directions for an ancient craft*. Interweave Press.
Ryder, M. L. (1973) *Hair*. London: Edward Arnold. (加藤淑裕・木村資亜利 訳『毛の生物学』朝倉書店1980年).
Ryder, M. L. (1983) *Sheep & man*. London: Duckworth.
Zeuner, F. E. (1963). *A history of domesticated animals*. New York and Evanston: Harper & Row, Publishers.

〈中国語〉

- 谢成侠编著(1985). 中国养牛羊史(附养鹿简史)农业出版社.
王安越(1989). 乌珠穆沁的类型分析.《中国养羊》, 1: 9-10.
毛新元(1989). 关于两型毛定义的商榷.《中国纤检》, 2: 35-36.
刘海源(1995). 绵羊绒纤维的形态结构及其与山羊绒的比较研究.《毛纺科技》, 5: 40-45.
赵云峰(1998). 浅析绵羊绒的开发.《中国养羊》, 2: 32.
王趁红, 沈金清, 王柏华(1998). 毛绒类纤维鳞片排列特征统计分析.《北京服装学院学报》, 18(2): 12-15.
坡・特木尔(2005). 培育目前及未来市场需求的乌珠穆沁羊.《全国畜禽遗传资源保护与利用学术研讨会》.
佟玉林(2005). 浅论乌珠穆沁羊遗传资源保护与开发利用.《全国畜禽遗传资源保护与利用学术研讨会》.
王玉, 刘卫平, 沙志娟等(2006). 呼伦贝尔羊“巴尔虎”品系的外形分析.《中国草食动物科学》, 1: 142-143.
李宏图, 秦秀娟, 乌恩巴雅尔等(2006). 呼伦贝尔羊“短尾”品系的外形分析.《中国畜牧兽医学会养羊学分会全国养羊生产与学术研讨会》, : 148-149.
郑文新, 王乐等(2009). 关于“绵羊绒”纤维分类以及名称的考证研究.《草食家畜》, 2: 4-9.
樊宏霞, 薛强(2010). 内蒙古养羊业的现状、问题及对策.《内蒙古农业大学学报(社会科学版)》, 12(6): 95-97.
丁晓杰(2014). 日本主导下伪蒙疆政权绵羊改良计划的反复及破灭.《古今农业》, 2: 81-91.

〈日本語〉

- 井島重保(1929)『羊毛の研究と本邦羊毛工業』光弘堂。
伊東光太郎(1957)『日本羊毛工業論』東洋経済新報社。
今岡良子(2002)「1990年、バヤンホンゴル県における広域調査のフィールド・ノート」『大阪外国語大学論集』

26。

F・E・ゾイナー(1983)『家畜の歴史』(国分直一・木村伸義 訳) 37 (6): 272-281, 法政大学出版会。

M.L. ライダー(1980)『毛の生物学』(加藤淑裕・木村資亜利 訳) 朝倉書店。

大内輝雄(2015)「日本のウールの歴史は百年」『SPINNUTS』90(1): 2-3。

小貫雅男(1985)『遊牧社会の現代』青木書店。

大阪大学歴史教育研究会(2014)『市民のための世界史』大阪大学出版会。

加藤定子(2002)『古代中央アジアにおける服飾史の研究 ―パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版。

加茂儀一(1973)『家畜文化史』法政大学出版局。

木戸衛一編(2014)『平和研究入門』大阪大学出版会。

草刈虎雄(1950)『畜産学』実業教科書株式会社。

小長谷有紀(1996)『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。

佐々木秀賢(1936)『毛織工業』一宮市工業会。

芝田清吾(1957)『最新畜産学』明文堂。

白石典之(2002)『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社。

全国経済委員会編; 中支建設資料整備委員会訳編(1941)『支那の毛織工業』(編譯彙報; 第52編) 南京: 中支建設資料整備事務所編訳部。

竹沢泰子編(2005)『人種概念の普遍性を問うー西洋的パラダイムを超えて』人文書院。

武見芳二(1938)「蒙疆地域とその羊毛の将来」『地理』1 (3): 110-113。

谷泰(2010)『牧夫の誕生 ―羊・山羊の家畜化の開始とその展開』岩波書店。

ダイヤモンド社編(1967)『ウール・羊とウールと人間と』ダイヤモンド社。

角替利策(1944)「大東亜戦争と繊維工業」『繊維学会誌』1 (5): 297-303。

角田健司(2009)「ヒツジ ―アジア在来ヒツジの系統―」在来家畜研究会(編)『アジアの在来家畜』名古屋大学出版会。

角田健司(2010)「ヒツジ」正田陽一(編)『品種改良の世界史・家畜篇』悠書館。

角山栄(1975)『産業革命と民衆』河出書房新社。

中生勝美編(2000)『植民地人類学の展望』風響社。

中原重樹・林英夫(1937)「支那山東省産羊毛に就いて」『日本畜産学会報』10 (3-4): 299-304。

野澤謙・西田隆雄(1981)『家畜と人間』出光書店。

長谷川有紀(1996)『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。

バ・エルデネツェツェグ(2009)『モンゴルの伝統的なフェルト作り』ウランバートル。

福井勝義・谷泰編著(1987)『牧畜文化の原像 生態・社会・歴史』日本放送出版協会。

ブレブドルジ・アリユンダリ(2011)「モンゴルの羊毛のデザイン」卒業論文, 京都工芸繊維大学。

本出ますみ(1988)(2016改訂版)『羊の手帖』SPINNUTS。

南満洲鉄道株式会社天津事務所調査課編(1936)『北支那の羊毛』(北支経済資料; 第32輯) 天津: 南満洲鉄道株式会社天津事務所。

百瀬正香著, 田邊佳子絵(2000)『羊の博物誌』日本ヴォーグ社。

八巻邦次(1995)「羊毛の品質について」季刊誌『シープジャパン』4月号。

山根章弘(1979)『羊毛文化物語』講談社。

楊海英(1996)「モンゴルにおけるフェルト造り ―方法論と儀礼性を中心に―」『繊維製品消費科学。』

横堀善四郎(1932)「満蒙の家畜衛生」『中央獣医会雑誌』45 (5): 364-370。

(あるす)